文末詞「の」が記憶に与える影響：基本機能が異なる「よ」との比較
Memory effect of sentence-final particle “no”: Comparison with “yo”

伊東昌子[†]，永田良太[‡]
Masako Itoh, Ryota Nagata

[†]常磐大学，[‡]鳴門教育大学
Tokiwa University, Naruto Education University
masakoit@tokiwa.ac.jp

Abstract

This study examined influence of the sentence-final particle “no” on memory in comparison with “yo” which has different basic function in discourse. Three experiments showed that “no” had positive effects on memory, whereas “yo” did not. The effect was considered as one kind of Zeigarnik effect.

Keywords : sentence-final particle “no”, sentence memory, discourse

1. はじめに

伊東・永田(2007)と伊東(2008)は，談話場における文末詞「の」の使用がメッセージの記憶を促進することを示した．本稿ではその原因を解明するため，基本機能が異なる「よ」との比較を行った．文末詞「の」は，現メッセージの背景となる先行状況と現状況の蓋然性に送り手がどうコミットしているかを曖昧にしたままメッセージを終了させる基本機能を持つ．言い換えれば，不明確な意図が示された状態になる．

「の」は相互行為を期待することを暗示するので，その状態での不明確な意図は未完の意図として機能し記憶に留まりやすいと考えられる．この現象はツァイガルニク効果として知られる．伊東(2007)では，女子大生の一日を綴った文章とその各文に文末詞「の」を付加した文章を用いて実験を行った．その結果，文末詞付加文で構成された文章の記憶成績は，宣言文の場合よりも高くなった．しかし，この結果は文末詞が会話文でよく使用されることから，受け手の親しみや関わり感を引き起こしたために，宣言文の場合より記憶に留まり易かった可能性がある．そこでメッセージの送り手が新たな状況の展開にコミットしていることが明らかな文末詞「よ」を用いて，宣言文との記憶成績を比較した．

2. 文末詞「よ」を付加した文章

刺激材料　「私の趣味」と題した文章（表 1）．9 個の宣言文から成る文章A（371 字）と，第一文を除いた各文に文末詞「よ」を付加した文章B（379 字）．記憶問題　12 問．与えられた文節に対し「その表現があった」「ちょっと違うがそのような表現があった」「なかった」を答える．

表1　宣言文と終助詞付加文（〇に「よ」がある）

私の趣味は旅行で，これまでに色々な場所を旅してきた。よく言われることだが，旅に出ると，慌しい日常から解放されて，本当に気持ちが晴れ晴れする〇。 歴史のある古い町が好きで，国内で今まで行った場所で良かったのは京都と鎌倉，それと金沢も良かった〇。特に，春の京都と冬の金沢は風情があったが，今度は東北にも行ってみたい〇。 海外には2回しか行ったことがないが，印象に残っているのは大学3年生の時に行ったフランスだ〇。初めての海外旅行で不安だったので，ツアーに参加したのだが，楽しかった〇。 フランスで一番良かったのはエッフェル塔で，展望台からはパリの街が一望できて，最高だった〇。ベルサイユ宮殿や凱旋門にも行ったが，短時間での見学と人の多さに疲れた〇。 ツアーは時間と行動が制約されるので，今度行く時は一人で行って，ガイドブックに載っていないような場所をゆっくり歩きたい〇。

参加者　大学生男女 49 名．着席状況により宣言文条件 22 名，文末詞条件 27 名．

手続き　講義授業を利用した．表紙，刺激文，クレペリン課題，記憶問題を別頁に綴じた冊子を配布した．まず一読させ，次に静かに発話しながら何度も読むよう教示した(2 分)．この教示は文面を目で追うのみではなく，口調を確かめながら読ませるためである．終了後は 1 分間のクレペリン課題と 2 分間の記憶テストを行った．

結果　宣言文条件と文末詞付加文条件の平均記憶得点（*SD*）は，それぞれ 6.82（1.30）と 7.00（1.54）であり，条件間に差はなかった．

伊東・永田（2007）と上記実験より，文末詞「の」が記憶に与える効果は，不明確な未完の意図の暗示による可能性が高い．ただし文章刺激の場合は，文末詞を何度も使用するので，全体的な暗示感が強まったのかもしれない．談話場では脈絡がないメッセージが行きかうことが少なくない．その場合でも局所的に記憶への影響があるだろうか．この点に関しては，伊東（2008）が複数の短文を用いて検討した．

3. 文末詞「の」の局所的作用

伊東（2008）は「～をーしたい」という短文を20個用意し，文末詞「の」付加文と宣言文を任意に配して一文ずつ提示し（文末詞は読み上げるときに付加するのみ．印刷はすべて宣言文），大学生に記憶させた．結果の処理に関しては，初頭効果と新近性効果の影響のない系列位置曲線の中央底辺部のみとし，6番目から13番目の範囲の宣言文と文末詞文について，直後と遅延（1週間後）の記憶成績を比較した．結果は直後・遅延共に文末詞文の記憶成績がよかった．

未完の意図を暗示する効果が局所的に働くようではあるが，確認すべき点がある．それは文末詞文については，視覚的に提示される刺激と読み上げが異なっていたので，これが記憶に何らかの手がかりを与えた可能性がある．この点を以下の実験でさらに検討した．

3-1 視覚提示と聴覚提示を一致させた短文刺激

刺激材料　伊東（2008）で用いた短文20個．文末詞も印刷した．参加者　大学生男女30名．手続き　伊東（2008）と同様に20個の文を記憶させ，直後再生と1週間後の再生を実施した．

結果　直後再生：文末詞付加文と宣言文の平均再生率（*SD*）は，それぞれ.47(.25)と.34(.26)であった．*t*検定の結果，条件間に有意差が認められた（t=2.28, p<.05）．遅延再生：平均再生率はそれぞれ.25(.19)と.14(.14)であった．*t*検定の結果，有意差が認められた（t=2.59, p<.05）．

文末詞「の」の局所的な記憶促進効果が認められたが，それが未完の意図の暗示によるものかどうかを確認するために，次の実験では，文末詞「よ」を用いて記憶への影響を調べた．

3-2 文末詞「よ」を用いた短文刺激

刺激材料　「～をーしたい」という短文20個．「よ」に適した下記の文内容とし，文末詞文と宣言文は各10個．2連を許して任意に配した．

「本を売りたい」「鳥を飼いたい」「歌を作りたい」「旅を続けたい」「壁を直したい」「箱を集めたい」「友を送りたい」「品を定めたい」「道を知りたい」「弓を習いたい」「席を決めたい」「山を歩きたい」「店を開きたい」「雲を描きたい」「靴を買いたい」「人を選びたい」「兄を呼びたい」「技を伝えたい」「海を渡りたい」「夢を与えたい」

参加者　大学生男女32名．手続き　伊東（2008）と同様に20個の文を記憶させ，直後再生と1週間後の遅延再生を実施した．

結果　直後再生　文末詞「よ」付加文と宣言文の平均再生率（*SD*）は，それぞれ.44(.21)と.42(.29)であった．*t*検定を行ったところ，条件間の差は認められなかった．遅延再生　平均再生率（*SD*）は，それぞれ.18(.16)と.23(.21)であった．条件間の差は認められなかった．

4. 考察

基本機能として未完の意図を暗示せず新たな事態の展開を示す「よ」を用いた場合は記憶促進効果が認められず，「の」で促進効果が認められた．この結果は，「の」の促進効果が不明確な未完の意図を暗示して，さらに検証が必要ではあるが，一種のツァイガルニク効果を引き起こした可能性が高い．

文末詞は言語要素ではあるが，その働きは非言語情報に近く，談話場におけるメッセージの送り手の情緒的・認知的スタンス等の心理的・社会的コンテクストの手がかりを提供する．談話場に参加する人々は，こうした手がかりに方向づけられて相互行為を行い，参加のコンテクストを形成する．受け手が次に送り手になるときは，その手がかりに即したメッセージの内容，表現，時期を状況的に判断するのであろう．

文末詞の使用とそれが伝える微妙なニュアンスへの敏感な反応は，言語実践に関する文化的暗黙知と考えることができよう．今後も談話場における実践としての言語使用とその文化的生態に光をあてたい．